

ヒラメ稚魚期での水温が無眼側体色異常に及ぼす影響

福島県水産種苗研究所

部門名 水産業－栽培漁業－ヒラメ
担当者 池川 正人

I 新技術の解説

1 要旨

水揚げされたヒラメ放流魚の体色異常が著しい場合、異常のない魚より安い価格で取引されることが多く、単価向上のため放流種苗の体色異常の軽減技術を開発する必要がある。
今回、60日齢から放流サイズ(43～100mm)での稚魚期の水温が無眼側体色異常に与える影響について明らかにした。

- (1) 60日齢のヒラメ種苗を100L水槽6面にそれぞれ100尾收容し、2面ずつ16、18、20℃に設定し飼育した(16℃区1、2、18℃区1、2、20℃区1、2)。おおむね放流サイズ(100mm:94～100日齢)に成長した時点で取上げ、無眼側体色異常(黒化)の度合いを記録した。
- (2) 黒化の度合いは、体色異常判定指数で記録し、黒化のみられないもの(正常)を1、軽微な異常を2、表面積1/2未満の異常を3、1/2以上の異常を4とした。
- (3) 無眼側が正常であるもの(判定指数1)の割合は16℃区が80～88%、18℃区が50～54%、20℃区が40～54%であり、16℃区が18、20℃区と比較して高いことが示された。18℃区、20℃区の間では明確な違いはみられなかった。

2 期待される効果

放流用ヒラメ種苗を生産する際、60日齢以降における水温を16℃に設定することで、無眼側体色異常が軽減することが期待できる。
放流魚の漁獲単価が上がり、水揚げ金額が増加することが期待される。

3 適用範囲

(財)福島県栽培漁業協会

4 普及上の留意点

飼育過程で大量へい死等が発生すると、飼育条件を整えても無眼側体色異常が生じる場合がある。
16℃にて飼育した場合、18～20℃と比較し成長が若干遅れることもあるので、生産計画を立てる際留意する必要がある。

II 具体的データ等

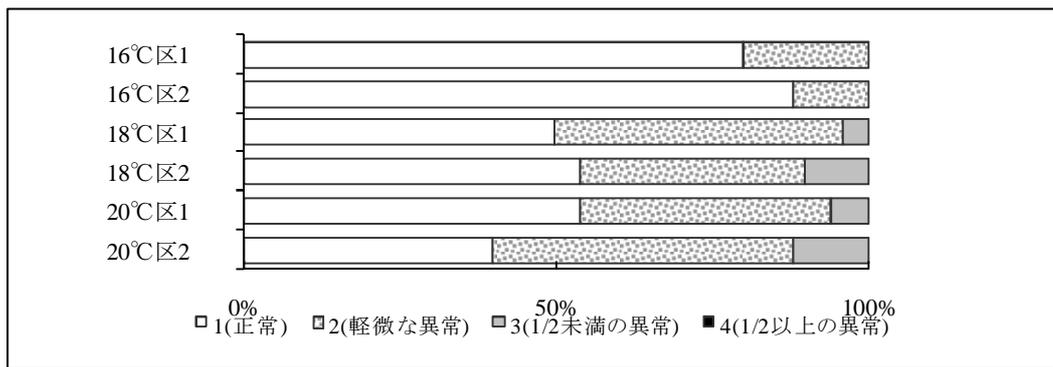
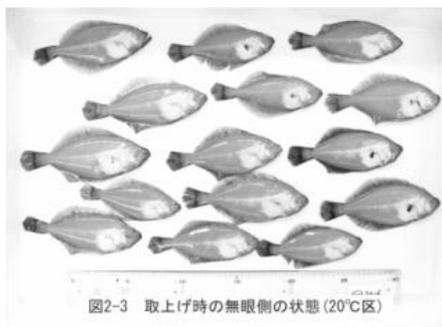
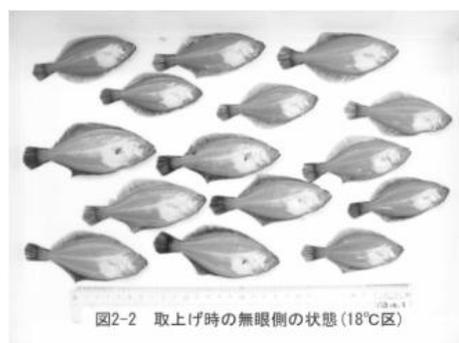
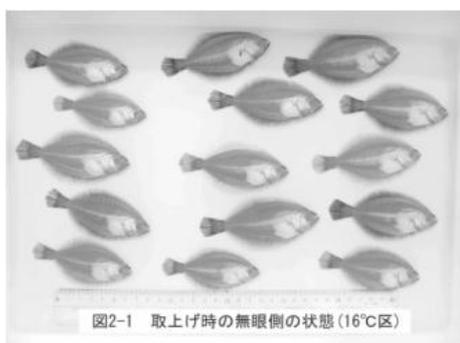


図1 稚魚後期の水温と判定指数の関係



III その他

1 執筆者

池川 正人

2 研究課題名

ヒラメ優良種苗安定生産技術の確立

3 主な参考文献・資料

平成21年度普及に移しうる成果